2022「植村直己冒険賞」受賞者が決定

植村直己冒険館
Uemura Naomi Memorial Museum

たった一人で冬の北海道分水嶺ルートを歩いて縦断

野村良太（のむらりょうた）さん

※写真はすべて野村良太さん提供

2月6日、2022「植村直己冒険賞」受賞者発表の記者会見を東京会場（アルカディア市ヶ谷）と豊岡会場（府中小学校）をオンラインでつないで行いました。

今回は、2022年に日本人が挑んだ73件の冒険行の中から、北海道分水嶺（ぶんすいれい）ルートに単独で挑戦し、一つなぎでの縦走を達成した野村良太さんが選ばれました。国内の冒険では初の受賞となります。

「北海道分水嶺ルート」とは、北海道最北端の宗谷岬から南端の襟裳岬（えりも）までいくつもの山々が連なってできた670㎞のルートです。過去にこのルートを何回かに分けて到達した人はいたものの、一つなぎで完走した人はおらず、綿密な計画と不撓不屈（ふとうふくつ）の精神により前人未到の大冒険を成し遂げました。

なお、本賞の授賞式を6月3日、日高文化体育館（日高町祢布）で開催します。冒険賞の授与のほか、野村さんの講演も行いますので、皆さん、楽しみにお待ちください。

《問合せ》生涯学習課☎23-0341

国内で残された最難関ルートを63日間かけて単独縦走

北海道の南北を連なる稜線「北海道分水嶺ルート」。野村さんは、藪漕（やぶこ）ぎを避けるためあえて積雪期に挑戦しました。最大で45kgのザックを背負い、途中風速40mという台風並みの猛吹雪の中を63日間かけて進みました。稜線と呼ばれる両端が崖に挟まれた路を進んでいくため、一歩間違えれば命はありません。このルートはいくつかに分けて到達した人はいましたが、一つなぎで到達した人はいませんでした。このようなことから国内で残された最難関の縦走冒険であると言われてきました。

書籍『北の分水嶺を歩く』と出会い計画を着想

野村さんは北海道大学のワンダーフォーゲル部に所属し、登山を始めました。62代目の主将を務め、先頭に立って部を引っ張りました。大学卒業後も登山活動を続け、その過程で出会ったのが『北の分水嶺を歩く』（工藤英一著・山と渓谷社）という本でした。この本のあとがきに「いつの

北海道分水嶺ルート

分水嶺とは

異なる水系の境界線となる稜線（尾根）のこと。北海道にはたくさん分水嶺があるが、今回は北海道の北から南に延びる稜線を踏破

野村良太さん喜びの声

冒険賞にふさわしい人間になれるように今後も精進

このような賞をいただき誠に光栄です。最初に受賞の連絡をいただいたとき、あまりにも予想していなさすぎて、驚きのあまり言葉に詰まりました。ずうずうしくも承諾の返事をしましたが、電話を切って冷静になってみると本当に自分でいいのかと、正直思いました。

植村さんが遭難されてから10年後に生まれたので、リアルタイムの植村さんは知りません。植村さんは伝説の偉人というイメージが強いです。植村さんはいくつか書籍を残しているので、それを読めば、彼の生きざまを追体験できます。そのお陰で、僕の中にも植村スピリットが少なからず生きているのではないかと思っています。

植村直己冒険賞にふさわしい人間になれるように、また、自分の軸がぶれないように今後も精進していきたいと思います。

（２月６日、受賞者発表記者会見にて）

▲スタート地点の宗谷岬にて（2022年2月26日）

▲雪山の中にテントを張り、日高山脈の夕暮れを望む（2022年4月23日）

日か誰かに、人並みはずれた精神力と強靭（きょうじん）な体力の持ち主に挑戦し実現してもらいたい。これからの若き岳人（がくじん）に期待している。感動と夢を与える本物の山行になると信じている。（要約）」と書かれていました。この言葉が野村さんの心を惹（ひ）きつけ、深く脳裏に焼き付きました。

失敗を経て周到に準備

野村さんは、実は２０２１年に本ルートを挑戦していました。しかし、計画とのギャップや天候悪化によるトラブルなどにより撤退を余儀なくされました。この失敗を経験し、今回の挑戦では計画を十分に練り直しました。失敗を経験し諦めるのではなくどうすれば成功するかを考えました。夢を実現する野村さんの挑戦は、私たちに勇気を与えてくれました。

自分のやりたいことが見つかれば人生が豊かになる

野村さんは会見を見守っていた府中小学校の児童たちに次のように語りかけました。

「登山に出会って自分が心からやりたいことが見つかりました。いろいろなことにチャレンジして自分が本当にやりたいことを見つけることが人生を豊かにすることにつながると思います。何か打ち込めるものを見つける、見つかったような気がすれば、それに全力で突き進む。違うなと思ったら少し変えてみる。そうしたことをたくさん繰り返すことがいいと思います。」

４月に野村さんはヒマラヤにある未踏峰の山に挑戦します。海外のフィールドにも目を向け、更なる挑戦を模索しています。自分のやりたいことに素直に真摯（しんし）に向き合い続けて挑戦する姿勢、謙虚な人柄には植村直己と通ずる姿を感じます。野村さんの成し遂げた偉業をたたえ、これからの挑戦にエールを送ります。

▲多くの仲間に迎えられ、ゴール地点の襟裳岬に到達（2022年4月29日）

野村良太さんプロフィール

28歳。1994年大阪府豊中市生まれ。札幌市在住。登山ガイド。北海道大学在校中にワンダーフォーゲル部に所属し、登山を始める。同部では主将を務める。卒業後は2019年積雪期の知床半島全山単独縦走（12泊13日）、日高山脈全山単独縦走（16泊17日）をいずれも荷物補給や支援を受けず達成。2020年には厳冬期表大雪十勝連峰縦走（11泊12日）を達成。令和元年度北大えるむ賞、日本山岳・スポーツクライミング協会山岳奨励賞を受賞。